

一八〇〇年頃のロマン主義、實在論及び觀念論

パウエル・ツイツヒエ

1 「實際の無い實在論」と「新たな神話論」ーロマン主義のプログラムにおける實在論

一八〇〇年に出版された『アテネウム』第三卷に収録の「詩についての対話」において、数ある驚くべき着想の中の一つとして挙げられるのは、フリードリッヒ・シュレーゲルが「新たな神話論 (neue Mythologie)」と「實際の無い實在論 (gränzenloser Realismus)」という両者の間に構想する密接な連関である。⁽¹⁾ これら「神話論」と「實在論」という二つのコンセプトが目標設定のものとして考えられていることは明らかである。また、これら両者は、双方の側から互い同士を照らし出し合っているとともに、互いに対して修正を加え合っている。このような意味での實在論が冷静で還元的な事実信奉の態度 (nüchtern-reduktive Faktenglaubigkeit) を意味するのではないのと同様に、新たな神話は、およそ秘儀とはなり得ない。

シュレーゲルは、神秘のとらえ難さという一方のものと、事実的なものの知識的な確実性 (die epistemische Gewissheit) という他方のものというこれら両局面を実際に結び付けようとしている。上記の対話篇の中の対話

の参加者たちは、シュレーゲルによれば、「一歩一歩、極めて神聖な神秘の確実性へと」導かれることになる。²⁾その際、シュレーゲルは、実定的に確保された知識論的述語 (epistemisches Prädikat)、『すなわち確実性という述語を諸神秘の超越的な神聖さと結び付けよう』と目指している。

こうした実在論のコンセプトは、諸々の神秘や神話論に意識的に接続するのであるが、そのような神秘や神話論といったものは、実在論的な態度を出来得る限り自然科学的な認識 (naturwissenschaftliche Erkenntnis) のモデルに基づいて方向付けるような、また実在論的な冷静さ (realistische Nüchternheit) を觀念論的な熱狂 (ein idealistischer Enthusiasmus) に対置するような、そうした現代の諸期待に矛盾しているといえる。

反対に、こうした実在論の体系的な位置や概念的諸前提、また諸含意を分析するならば、次のような問いへの通路が開かれる。すなわちその問いとは、ロマン主義の時代において、包括的であるとともに方向付けを与えるような諸体系 (umfassende Orientierungssysteme) の探求—これらの体系が哲学的にであれ、詩学的にであれ、或いは宗教的に動機付けられているのであれ—が、現実の重要な諸現象やこれらのものに適合した認識諸形式についての議論へと転換されるに至ったのは如何にしてなのか、というものである。

分析を進めて行くならば、こうした議論が驚くほど未決定さを残したままの状態でなされたことが示される。確固たる共同戦線が絶えず探し求められては、それらの戦線に対して名称が与えられるに至る。だがこうしたことと引き換えに、それまで成立していた議論の諸形式が踏み越えられ、それによって新たな諸概念の形式が開示される、という結果になる。

シュレーゲルの実在論は、確かに明瞭に説明されるような仕方においてはほとんど言えないものの、彼の時代の哲学的觀念論 (der philosophische Idealismus) と直接に結び付いている。シュレーゲルは、次のような実在的欲

求 (ein existentielles Bedürfnis) に対して解答を与えることこそ、新たな神話論の本質的課題であるとらえていた。すなわちその欲求というのは、「人間性がそのあらゆる力を振り絞って、自らの中心を見出そうとする」という、あらゆる諸現象の中の現象」のことである。^④

これに対する究極的に唯一の候補としてシュレーゲルが差し出すのは、哲学的観念論 (der philosophische Idealismus) である。この観念論は、中心を求める只中におけるこうした格闘を克明に記録するとともに、あらゆる有限な理性的存在者 (Vernunftwesen) に対して、このような中心を人間的主体のうちを示すよう要求している。シュレーゲルによれば、こうした観念論的な出発点を基礎とすることで、「その懐から新たな、そしてまた際限の無い實在論 (gränzenloser Realismus) が立ち上がるのでなければならず、また実際に立ち上がることになるのである」^⑤。

こうした言明については、以下の a)、b)、c) に示されるように、様々な仕方でも読み取ることが出来る。すなわち一つには、a) 観念論と實在論とを媒介するというプログラムとして読み取ることが可能であり、その場合、これら両者は、共に哲学の新たな形式のうちへと合一されることになる。またもう一つには、b) 異なる立場の連続として読み取られるのであり、實在論は、この連続において自らの根源である観念論を引き継ぐことになる。更にまた、c) 後に続いて登場するところの實在論による観念論の根本的な反駁としても読み取ることが出来る。

最近の研究では、ロマン主義が観念論という同時代の哲学との関係において、この観念論―それがカント的な観念論として理解されるのであれ、あるいはフィヒテ的な観念論として理解されるのであれ―と歩調を合わせ、それを継続するというようには決して理解され得ない、ということが強調されている。^⑥

實在論的立場と観念論的立場との両者の合一については、数多くの形式が認められる。^⑥ 例えば、フィヒテは、自

らの哲学が「観念—實在論 (Ideal-Realismus)」であることを主張してやまなかつた。カントは、彼の『純粹理性批判』が經驗的・實在論的 (empirisch-realistisch) な性格と共に、超越論的・観念論的 (transzendental-idealistisch) な性格をも併せ持ったものである、ということ強調しており、また、そのことを同書の一七八七年刊行の第二版の中で浮き彫りにしている^⑦。更にまた、観念論と實在論の理想形的主人公としてのフィヒテとスピノザとの両者の哲学を結び付けるという、ロマン主義のプログラムが挙げることが出来る^⑧。また、シェリングは、哲学を「より高次の實在論 (höherer Realismus)」へと作り変える、という提案を行っている^⑨。

實在論と観念論両者の合一というテーゼは、どの哲学的思想が観念論的であるととらえられ、或いはまた實在的であるととらえられるのかは既に確定済みである、ということを出発点としている。だが、これについては更なるニュアンス付けが必要である。確かに、それぞれの人物を観念論側の、或いは實在論側の陣営に分類するということは、攻撃的な議論に際してよく使われる道具であった。とはいえ、甚だしく攻撃的な態度や論争の激しさに対して、そうしたものと同様に鋭利な概念的道具立てが用意されているわけでは決してなかった。—両陣営の間で応酬された非難の多くは、対称的 (symmetrisch) なものであって、同じような文言において互いの陣営に対して向けられていたのであった。

一八〇五／六年の『予備教育と論理学の諸講義』の「補遺」における、實在論を他の諸体系と並ぶ哲学的体系の一つであるとするシュレーゲルの定義に目を向けるならば、「實在論」というものに結び付けられ得るような連想や推論の数々がいかに多様であったか、ということが極めて明瞭になる^⑩。

「この体系は、唯一にして一切を包括し、不変にして無限な存在者 (ein einziges, allumfassendes, unveränderliches,

unendliches Wesen) を主張し想定する、ということのうちに基づいている。この存在者の認識は、経験のうちに、或いは感覚的諸印象や諸知覚のうちに汲み尽されるのではなく、ただひとえに純粹な理性 (die reine Vernunft) によってのみ獲得され得る。純粹理性によるこうした認識は、唯一の直接的にして完全に確實なものである⁽¹⁴⁾」。

このような読み方が宗教的諸動機によって導かれていることは明らかである。現実性が唯一にして包括的な存在者 (ein einziges, umfassendes Wesen) のうちへと統合されるのだという想定は、人間的な思考や活動から逃れ去る無限な存在者というものに対して場所を開けている。とはいえ、シュレーゲルによれば、こうしたことは「極度に危険で誤った思考法」である。というのも、この思考法は、当然の帰結として汎神論 (Pantheismus) と宿命論 (Fatalismus) へと通じるからであり、従って、スピノザの哲学と絶えず結び付けられてきた諸問題を直接に呼び覚ますことにつながるからである。(そうはいつても、シュレーゲルは、スピノザが彼自身の実在論に対してこうした諸条件のもとでなお考えられる限り最善の道徳を結び付けているということをつけ加えているわけでもあるのだが)。

認識論的にみるならば、このような実在論は、シュレーゲルによれば、当然の帰結として「宗教的熱狂 (religiöse Schwärmerei)」へと至る⁽¹⁵⁾。もしも、唯一の根本概念が世界全体について言明すべき一切のものを内包するとするならば、「そのことよって、この一つの根源的真理の更なる展開や形成、また伝達の一切が無意味で余計であると認識される」ことになろうし、またそれとともに、一切の思考の努力は、無益であるとともに思い上がったものであるということになる⁽¹⁶⁾。

『哲学批判雑誌』におけるシェリングとヘーゲルによる哲学的諸批判を想起させるところの用語法に置き換えて

みるならば、他ならぬ實在論者は、有限なもの非實在性 (Irrealität) で満足しなければならぬことになる。「實在論者は、有限なもの無限なものを完全に分離するわけだが、その際、有限なもの實在性を完全に否認する。實在論者にとって、徳 (Tugend) と完全性 (Vollkommenheit) とは最高にして唯一真なる實在性以外の何ものでもない⁽¹⁴⁾。有限なもの無限なものとの構成的合一は、不可能とされるに至る。また、神の表象は、「實在性」の根源的定義を導く役割を果たすかのように見えたが、そうしたのもまた、把握不可能となる。ニヒリズムと無神論がその必然的帰結として登場する⁽¹⁵⁾。

唯一にして一切を包含し、また純粹理性によってのみとらえられるところの現實存在を想定することによって与えられるような、實在論の定義は、觀念論的立場と両立可能であるように差し当たり思われる。シュレーゲルの場合、觀念論と實在論の両者を批判的な仕方で際立たせることは、このような實在論の宿命論的・決定論的含意を介してなされているといえる。これに対し、觀念論は、シュレーゲルからするならば、「自由、活動性、生き生きとした運動性 (lebendige Beweglichkeit)」によって定義されており、いかなる機械論に対しても根本的に対立するものとしてとらえられている⁽¹⁶⁾。

このようにして、「詩についての対話」におけるシュレーゲルの諸考察に接続するならば、次の問いが立てられる。その問いとはすなわち、如何にしてロマン主義が觀念論の一時期であるとともに實在論の一時期としても実際にとらえられるのか、というものである。このような仕方での課題の立て方は、諸人物同士の位置関係を手掛かりに根拠づけることも出来る。ヘルダー、ヤコビー、或いはまたジャン・パウロといった著述家達は、反觀念論的であるととも實在論的な把握の代表的な支持者であるが、それとともに様々な仕方でロマン主義の議論とも積極的に結びついている⁽¹⁷⁾。

とはいえ、観念論と實在論の両者は、ここでは既にそれぞれに確定した思考諸形式として合一化されるわけではない。哲学的諸体系全体を裏付けのおおもとのコンセプトは、付加的につなぎ合わせることも出来ないし、単純に弁証法的に対置されることも出来ない。実存的に重要とみなされる諸議論に対して寄与するためにも、—実際、この点においてシュレーゲルの一八〇〇年の分析は代表的であるのだが—認識の新たな諸形式と現実性の新たなコンセプトの両者が導入されねばならない。

2 「カントとソファーで」—友好的な諸対話と攻撃的な諸論争

「實在論」という概念は、一八〇〇年頃には哲学用語として確立されてから既に数百年來の時を経ていた。中世の普遍論争は、實在論的（「實在的なもの (reales)」によって担われた）立場と唯名論的立場の両者による論争が起こっていた。だが、この概念は、カントに直接接続するところの議論において新たな機能を獲得するに至る。「實在論」という概念は、もはや専門化された哲学的議論内部の一立場を表すのではなく、他の諸立場と並ぶ、またそれらと批判的に対決するものとして、包括的で哲学的な立場を示している。「實在論」という用語がこうした包括的なコンセプトを表すようになったのは一八〇〇年頃からのことである。「経験主義 (Empirismus)」や「合理主義 (Rationalismus)」といった、今日では完全に自明な諸概念もこの時代にはじめてそれら独自の機能を果たすようになった。特に目を引くのが、實在論という概念が導入されるに当たって用語になお未決定な点がみられることである。いずれにせよ、「独断論 (Dogmatismus)」という用語は、少なくとも「實在論」と同じ位普及していたのであった。⁽⁸⁾

実在論をめぐる議論のダイナミズムは、一八〇〇年頃の時期には、いくつかの絶えず立ち現れる議論の諸要素によって刻印付けられていた。包括的な諸概念が用いられる際、それらの概念が互いに対して精密に境界付けられていなかった、ということは既に明白である。加えて、諸論争は様々な面で対称的な経過を辿っている。実在論は、当然の帰結としてニヒリズムと無神論へと導く、というシュレーゲルの非難に対し、観念論による主体と関連付けられたアプローチは、個人というものに対して過大評価を与え、その結果として、エゴイズムや、独我論 (Solipsismus)、無神論、またニヒリズムへと一直線につながる、という逆の非難が対峙する¹⁹⁾。

a) ヨハン・ゲオルク・ハインリヒ・フェーダー

激しい応酬が対称的な経過を辿るというこのことは、実際の同盟をしばしばグロテスクなまでに見誤ってしまう、といったことに対応している。ヨハン・ゲオルク・ハインリヒ・フェーダーが「カント氏とソファーで」²⁰⁾ 哲学的諸テーマについて打ちこけて語りたいた望んだ場合を例に挙げてみよう。フェーダーは、彼の手になるカントの『純粹理性批判』初版の書評において、カントが実在論を助長していると非難している²¹⁾。彼は、そのことがどれほどカントにこたえ、少なくともカントがすぐさまかつ断固としてこうした非難に対して自らの意見を表明するように仕向けたのか、ということに気付いていない²²⁾。

b) フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ

フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービは、フィヒテ宛ての公開書簡の中で、フィヒテの哲学を「編み物の靴下 (Strickrumpf)」すなわち毛糸の靴下に譬えたり、またしばらく後に「ニュルンベルクのいわゆる気まぐれな役者」

に譬えたりしたが、こうした諸々の非難は、どれほど機知に富んでおりの確に言い当ていようとも、無趣味な印象を与える。だが同時に、ヤコービはこうした諸々の非難を、フィヒテを「思弁的理性の真のメシア」とする極めて高い尊敬の表明と結び付けてもいる。²³⁾

ヤコービは、一八〇〇年頃の実在論を巡る議論の再構成に対して、極めて優れた出発点を提供してくれる。²⁴⁾ 既に一七八七年に、ということはつまり『純粹理性批判』第二版の出版以前に、ヤコービは、カントの超越論的観念論 (der transzendente Idealismus) を「我々実在論者 (wir Realisten)」の立場と対比している。これにより、実在論者たちのそのようなグループが既に成立している、ということからヤコービが議論を始めているのが分かる。ヤコービは、彼の対話篇『デヴィッド・ヒューム 信について』、或いは観念論と実在論について²⁵⁾」に対して、「超越論的観念論について」論じた「補遺」を付け加えている。ヤコービは、その中でカントの第一批判からの詳細な引用によって、カント哲学が実際に観念論へと通じている、ということを示そうとしている。彼は、この観念論からその反対の立場の提示へと論点をすぐさま移しながら、次のように述べる。

「それ故、我々実在論者が現実の諸対象であるとか、我々の諸表象から独立した物と呼ぶところのものは、超越論的観念論者にとっては諸々の内的な存在者 (innerliche Wesen) であるに過ぎない。こうした諸存在者は、我々の外にあるであろうところの物や、或いは現象が関係するところの物を表すのではなく、むしろ、一切の現実的に客観的なものを完全に欠くような、心性 (Gemüt) の単に主観的な諸規定なのである」。

諸対象は、超越論的観念論に従うならば、「諸表象以外の何ものでもない」、ということになる。²⁶⁾ こうしたことは、

次のような想定と、すなわち、我々がそもそも認識を有することが出来るためには、何らかの仕方ですら対象によって触発されるのでなければならぬ、という想定と同じであるとされてはならない。徹底的に超越論的・観念論的に考えるならば、「悟性こそ」、「中略」客観を現象に対して付け加える」ところのものに他ならないといえる。従って、外部からの印象は考えられ得ないことになる。だがヤコービからすれば、そうした諸々の印象を欠くならば、既にして感性というコンセプトは把握不可能であり、また、知のいかなる基準 (Standard) も失われてしまうことになる。観念論者は、絶対的に確実化された知 (absolut gesichertes Wissen) を基礎付けるといふその要求にもかかわらず、「徹底的に絶対的な無知 (durchgängige absolute Unwissenheit)」を認めざるを得ないよう仕向けられることになる。⁽²⁷⁾

ヤコービは、既に実在論者たちのグループ全体の名のもとに語っている。そうしたグループは、実際に示され得る。神学者や哲学者、詩人に加えて美の理論家 (Theoretiker der Ästhetik) といった様々な領域の著作家たちは、実在論的なアプローチをとっており、互いの著作を参照指示し合ったり、また往復書簡や個人的交流を通じて様々な仕方ですら結び付いていたのであった。こうした実在論的潮流の完全な再構成をここですることは出来ない。ヤコービと並ぶ主な中心的人物としては、クリストフ・ゴットフリート・バルデイリヤ、カール・レオンハルト・ラインホルト、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー、或いはジャン・パウルの名を挙げることが出来る。⁽²⁸⁾

c) クリストフ・ゴットフリート・バルデイリとカール・レオンハルト・ラインホルト

バルデイリとラインホルトの両者は、シェリングやヘーゲルといった観念論的著作家達の批判の標的となったわけだが、次のような実在論的要求を明確に描き出している。すなわちその要求とは、思考は自然的現実性 (die

natürliche Wirklichkeit) に自らが必然的に依存しているのを知るのでなければならぬ、というものである。バルディリの「合理的實在論 (rationaler Realismus)」は、本質的にはラインホルトの一八〇〇年以後の『寄与』によって呈示されているわけであるが、このバルディリは、カント哲学に対置するようにして、ライプニッツに依拠した理解の仕方を示している。

この理解によれば、因果性は、「心性の単なる形式ではなく、或いはこの形式の単なる結果なのでもなく、諸々のもの自体における實在的な何ものか」であるとされる。「この哲学に従うならば、我々が自然を作り出すわけではない。むしろ、我々は、自然を発見し、認識するのである。我々は、自然に対して我々の悟性の諸法則を指示するのではなく、むしろ我々の悟性の諸法則を介して自然を知ようになるのである。何故ならば、こうした諸法則は、同時に自然の諸法則でもあるのだから」⁽²⁸⁾。ラインホルトは、一八〇二年の『寄与』の中で、これに完全に対応することを、次のような仕方で定式化している。「単なる思考 (das bloße Denken) は、それが単なる思考である限り、自ら自身に矛盾する。というのも、思考は、思考である限り、その応用 (Anwendung) そのものにおいてのみ思考され得るのだから。そしてこの応用そのものうちに、自然における神の顕現 (Manifestation Gottes in der Natur) が存在する」⁽²⁹⁾。

対称の問題は、實在論者たちの多くのテキスト内部での根本的な態度の未決定さのかたちのうちにも既に反映している。フェーダーとクリスティアン・ガルヴェの手になる『純粹理性批判』初版のゲッティンゲン書評は、ひと際目を引くような態度の未決定さを含んでいる。その書評においては、一方では、以下の趣旨の非難が、すなわち、カントが認識と単なる諸幻影や諸幻想 (bloÙe Visionen und Phantasien) といったものを区別し得るための拠り所

となるようないかなる基準も示していない、という非難が展開されている。というのも、これらのものは「互いに結びついたかたちで現れることが極めて普通に起こり得る」のだからであるとされる。

また他方では、独断主義か懷疑主義のどちらか一方をとるという法外な要求に対して、「極めて自然な思考法 (natürlichsste Denkart)」とこう「中間の道 (Mittelstraße)」がその書評において要求されている。この思考法は、「我々の外的な実在性に即したものである」としての、極めて程度の強く持続的な感覚に、或いは極めて程度の強く持続的な仮象に」基づくとされている。感覚の位置付けが、今引用した箇所においては不明瞭なままにとどまっている。程度の強い感覚が、実在性の確実性を証明する保証人の役割を果たすとされる一方で、他方では、非実在的なもの (das Irreale) も感覚のうちに安定的なものとして現れ得るとされる。

d) エアハルト・ゲオルク・フリードリヒ・ヴレーデ

実在論をめぐる議論の更なる展開において、立ち入ったカント解釈から離れて常識哲学 (eine common-sense Philosophie) の方向へと向かって次第に舵を切っていくという、中間の道を求めるフェーダーの試みのうちに示唆されていた傾向が見出される。⁽⁸²⁾ なお極めてカント寄りの方向をとる議論の例としては、一七九一年公刊のエアハルト・ゲオルク・フリードリヒ・ヴレーデによる『実在論と観念論の矛盾 (Antilogie)』が挙げられる。⁽⁸³⁾ この著作は、はっきりと言明されているように、カントとライプニッツの「思考諸体系」の諸原理の「更なる吟味」と哲学史的な位置付けに捧げられている。

出発点となる問題としてヴレーデが見ているものは、理性と世界の両者がそもそも接触へと至り得るのは如何にしてなのか、という問いである。より厳密に言うならば、極めて頻繁に確認される「諸表象の反抗性 (Widerspa

nsjikerider Vorstellungen) によって、表象のうちに根本的な困難さが潜んでいることが示されている、ということである。⁽³⁵⁾

こうした困難さは、観念論的把握においては誤謬 (Irrtum) の可能性を把握可能にすることが困難である、ということによって裏書きされる。「理性が単にその本性を表出するということが真であるというのに、如何にして理性がア・プリオリに誤るということがあり得ようか」。全体として、ヴレーデにおいては實在論が優勢であるが、その理由は、この観念論が人間の思考の発展において根源的体系であるということだけにあるのではなく、とりわけて「現在の世紀が、實在論が自由や道徳性、及び地上的幸福に対して「中略」極めて好意的であり続けてきた、ということに対する証人である」からでもある。⁽³⁶⁾

e) ヨーゼフ・リュッケルト

ヴレーデのテクストは、理論哲学の諸々の問いを実践的・哲学的諸テーマに対する大きな関心と結び付けている。これら両モチーフの結合は、議論に対する後の貢献の数々を特徴付けてもいる。ヨーゼフ・リュッケルトは、イエーナで哲学を学んだが、一八〇一年には實在論を単刀直入に支持している。この實在論は、リュッケルトによれば、「完全に実践的な哲学 (durchaus praktische Philosophie)」としてとらえられるべきであるとされる。⁽³⁷⁾ シェリングは、『哲学批判雑誌』の或る書評の中でこの非難に対して非常に厳しく反論することになる。⁽³⁸⁾

リュッケルトが出発点とするのもまた、彼自身「第一定理 (erster Lehrsatz)」として定式化するところの問いである。「自由なものが (その外なる) 必然的なものと調和することは一体どのようなようにして可能であろうか」。そこから先の箇所において、リュッケルトは、「知」と「この知の實在性」の両者を区別している。

その際、彼は、知の彼岸なる水準 (ein Niveau) というものを主張するが、この水準は、人間の実存的な諸欲求、すなわち、「人間にとって必要であるもの」、「人間にとって最も神聖なもの」と結び付いている。⁽⁴⁰⁾ この水準は、知の彼岸なる基礎を指し示す。こうした基礎は、「いかなる知でもあり得ないようなそうした諸々の与件や活動」に對して「真理の規則 (Regel der Wahrheit)」を与えることが可能であるとされる。「調和の規則 (Regel der Harmonie)」は、リュッケルトによれば、それ自身いかなる知でもはやあり得ない。⁽⁴¹⁾ また、獲得された知の確実性がその内部で確認されると看做されるような基礎付けの議論は、知の彼岸を引き合いにしなければならぬとされる。こうした彼岸は、その場合かろうじて「実践的な仕方で (auf praktischen Wege)」獲得され得る、ということになる。⁽⁴²⁾ リュッケルトは、これによって同時に、学問の内部においてのみ基礎づけられるような哲学 (eine nur innerwissenschaftlich fundierte Philosophie) を退ける際に用いたと望んでいた基準を獲得することになる。

「一切の知の実在性が一切の知の彼岸にあるとともに、真理とは知によって解消され得ない課題である以上、学 (Wissenschaft) として完成するような哲学は、哲学ではない」⁽⁴³⁾。

実在的なものは、産出されるのではない。むしろ、「自由なもの」は、「かの必然的なものの、実在的なものの像 (Bild) となること」を指すのでなければならぬ。⁽⁴⁴⁾ リュッケルトの議論がフィヒテとカント両者の観念論に對する激しい批判によって担われていることは明白である。彼によれば、観念論は、「絶対的な恣意 (absolute Willkür) の体系へと解消する」と理解される。⁽⁴⁵⁾

f) クリステイアン・ヴァイス

リュッケルトのテクストと歩調を合わせたものとして、クリステイアン・ヴァイスによる「完全に実践的な哲学への目配せ」が挙げられる。これも同様に一八〇一年に出版されるとともに、シェリングによる厳しい批判の対象となってもいる。ヴァイスは、リュッケルトの「実践的方向」から一定の帰結を明確なかたちで引き出している。⁽⁴⁶⁾すなわちヴァイスによれば、哲学のこうした形式は、悟性や理論的認識への一面的な依拠に起因する諸問題を取り除くとともに、そうしたことによって、抽象的な悟性 (der abstrakte Verstand) の媒体において活動することの出来ない者達に対しても、哲学や学を近付き得るものとする と理解される。

シェリングの批判が出発点にするのが何処であるのかは明瞭である。シェリングは、そのようなことによって哲学全般を断念するに至ってしまっている、というように述べてヴァイスを非難している。従って、實在論をめぐる諸論争においては、如何にして哲学の異なる諸形式が互いに関係するのか、という問いだけが重要なのではないことが分かる。この問いは、そもそも哲学とは何であるのか、という問いとは独立に取り挙げる事が出来ないような性質のものである。哲学的諸体系 (die philosophische Systeme) は、或るより大きな全体内部の諸部分や、或いは大道具 (Versatzstücke) としてはとらえられない。むしろ、それらの体系は、それ自身哲学全体 (die ganze Philosophie) である、⁽⁴⁷⁾とすることを絶えず主張している。

g) フリードリヒ・ケッペン

フリードリヒ・ケッペンは、観念論に対する實在論による諸非難の極めて論争的な面に強調の置かれた要約を『シェリングの教説、或いは絶対無の哲学の全体』における攻撃的批判の中で示している。⁽⁴⁸⁾それと同時に、ケッペ

ンの著書は、實在論的グループの編成を描き出している。ケッペンは、補遺の中でヤコービの三通の書簡を公表しているが、これらの書簡は、ヘルダーやジャン・パウルを参照するようはっきりと指示している。⁽⁴⁸⁾ケッペンは、人間的存在及び思考の始原において「驚き(Wunder)」を想定する必然性を見落として、観念論者達を非難している。「我々人間は、被造的な存在者 (erschaffene Wesen) である限り、無からの創造 (die Schöpfung aus dem Nichts) という秘密のもとに、有限性という驚きのもとにある」⁽⁴⁹⁾。

一 際目を引くことに、ここでは無限性が驚くべきであるにとらえられておらず、むしろ他ならぬ有限性が、すなわち創造の現実性 (die Wirklichkeit der Schöpfung) が驚くべきであるにとらえられている。このことについては、基礎付けの諸構造に対する論証へと直接置き移して考えることが出来る。それによれば、どの論証課程も思考の彼岸なる始原 (ein Anfang jenseits des Denkens) を必要とするといえる。また、思考の領域内部での無限の前進 (ein unendliches Fortschreiten) は、ただ無限な反復 (eine unendliche Iteration) へと通じるだけであり、そのため、いかなる究極の基礎付け (Leitbegründung) をも果たすことはないという結果になる。

基礎付けの始原を構成的に確実なものにしようというどのような試みも、ケッペンがとりわけシェリングに目を向けつつ遂行するように、必然的に「夥しい否定の数々 (Menge Negationen)」へと通じる。「こうした否定の数々においては、いかなる始原も、いかなる終極も、いかなる尺度も、いかなる時間も、いかなる空間も、いかなる運動も、いかなる静止もない。そもそもいかなる相違もなく、むしろ絶対的同一性 (absolute Identität) だけが存在する」⁽⁵⁰⁾。ケッペンによれば、ただ「思い切った決心 (salto mortale)」を介してのみ—これは、「またもや対称的な非難である、というのも、「思い切った決心」というのは、ヤコービがスピノザ哲学と関わる事が出来るようになる仕方についてのヤコービ自身によるパラフレーズであったからである—「シェリング哲学の発生」は把握され得

る。一切の証明に先行するものは、それ自身証明され得ない。こうしたことのうちに、「意味(Sinn)」、「理性」また人格性といったものはその場所を得る。⁽³¹⁾

このようなことを、真とみなすこと (Fürwahrhalten) の能力や様態の述語へと置き換えてみるならば、次のようになる。すなわち、「信じること (Glauben)」は、人間的知の唯一可能な根源であり、またそのようなものとしてみるならば、構成に対置されねばならないことになる。⁽³²⁾ これによって、認識必然的な諸能力 (die erkenntnisnotwendigen Vermögen) は、感性的知覚と密接した位置へと移されることになる。「知覚、再認 (Wiedererkennen)」、また把握は、それらの様々な関係の仕方が高まるにつれて、我々の知性的能力の充実全体をなしている。⁽³³⁾

どの党派も、演繹的な証明過程が認識の基礎であるとすることを退ける点では一致している。⁽³⁴⁾ それぞれの党派は、批判的な意図のもとに、互いを演繹的思考 (das deduzierende Denken) という紋切り型のもとへと確定してしまおうと様々な仕方で試みている。ヤコービによる編み物の靴下の例えは、次のような哲学や学のとらえ方に対するカリチュア以外の何ものでもない。すなわち、そのとらえ方においては、ヤコービによれば、思考の道筋や過程が絶えず繰り返し絡まり合っているとされる (ここでもジャン・パウルが単なる繰り返し (bloßes Wiederholen) の無益さに対して見事なイメージを与えてくれる。「哲学とニュンフのエコーに対してはだれも最後の言葉を手元に持ち併せていない」⁽³⁵⁾)。

絶えず等しくあるようなもの (das Immergleiche) の空虚な繰り返しという非難は、今度は逆に、シェリングやヘーゲルといった人物から実在論者達に対して向けられることになる。この点でも、対称的に解釈する余地がなお残っていることが明瞭に分かる。実在論者達における理性超越的な始原性 (eine vernunfttranszendente Anfänglichkeit)

の想定も、更にまた始原の必然的思考可能性を絶えず要求することにより、第一の始原 (ein erster Anfang) を実在的なものうちに立てること (das Ausstellen) も、究極の基礎付け (Urbegründung) を非論理的に断念することとしてとらえることが出来る。

諸立場間の区別は、その都度の典型的な認識諸能力及び真とみなすこと (das Fürwahrhalten) の諸様態を手掛かりにすることでより明確なものとする事が出来るように思われる。一方の知覚と信じること (der Glaube) への信頼は、他方のカントとフィヒテのもとで訓練された絶対的な認識の諸要求に対峙している。こうした認識の特徴付けもまた、変動の最中にあることは確かである。

「意味 (Sinn)」は、「信じること (Glauben)」と同じように多義的である。また、他ならぬ実在論者たちこそ、感性の能力に接続するような沢山の新たな能力を導入しており、同時に、それらの諸能力は、この感性の価値を高めている。—「意味 (Sinn)」という場合、一方では感性的知覚 (sinnliche Wahrnehmung) との連想におけるそれが、また他方では、解釈学的理解 (das hermeneutische Verstehen) や包括的な意味の創設 (umfassende Sinnstiftung) としてのそれが例として役立つことであろう。⁽⁸⁾

3 「かすみ」と「共鳴」としての現実性。現実性の確保の新たな諸形式

諸論争の対称性、論争が行われる際の議論の鋭さ、また中心的な概念諸規定が未決定のままにとどまっていること、このようなことは、ここでは哲学全体の役割が議論されているのだ、ということを描き出している。問題となっているのは、次のような問い、すなわち、そもそも如何にして哲学の大枠の諸形式が特徴付けられ得るの

であり、それらの形式が互いの間で境界付けられ得るのか、という問いであり、また、如何にしてこれらの諸形式が、哲学そのものの範囲を超えて人間的生の全体を規定することが出来るのか、という問いである。既にこのことの中に、典型的なロマン主義の構想との親近性が認められる。諸時期全体の特徴付けの問題や、また特にこれらの時期の際立った特性の問題は、既に「詩についての対話」の中の「詩芸術の諸時期」についての論述が描き出しているように、ロマン主義の課題設定の本質的エレメントをなしている。

そうした境界付けの問いに対しては、既に諸論争の対称性が示しているように、いかなる確定された語彙も、またいかなる確立された諸論証や思考諸形式の在庫目録も依然として自由に使えるようになっていない。これまで例として引用してきた諸テキストを基に、いくつかの結論を直接に引き出すことが出来る。

實在論者達にとっては、自然諸科学がモデルとなっていない。實在的なものの範例となるのは、自然科学によってとらえられた個別的なものや出来事なのでもなく、また自然法則であるわけでもない。それと同時に、實在論者達が実用主義的な認識の諸要求を受け入れ、人間的知識の限界を強調する方に非常に傾いている、ということも明瞭である。

これに対して、厳密な学問性 (die strikte Wissenschaftlichkeit) や絶対的な拘束性 (die absolute Verbindlichkeit) という理想は、認識のア・プリオリな基礎づけというカントの構想に接続するようなかたちで、観念論者達によって保護されている。實在論的構想を動機付けているのは、感情、美学 (Ästhetik)、宗教体験 (Religionserfahrung) である。「實在論」は、客観的態度の冷たい光を決して輝かせてはならないのであり、それとは正反対に、むしろ誤謬の可能性を保証するという役割を果たすのであり、また感情が決定に関与する余地を許すのである。

こうした出発点の状況に対して、どのような思考の選択の余地が差し出されるのだろうか。このように問うこと

によって、「詩についての対話」の問題設定へと連れ戻されるに至る。求められなければならないのは何であるのかといえ、それは、思考を断念することと空虚な結果に終わるような多弁 (leerlaufendes Raisonieren) との間の、或いはまた、彼岸なるものとしての始原の在り方と始原を永遠に立てることとの間の、更にはまた、観念論と実在論との間の単なる対立といったものを包括するような、そうした諸概念や思考法である。

シュレーゲルは、自ら自身の体系を打ち立てることを断念している。シュレーゲルが目指した実在論の形式が、体系の形態へともたられられるということは決してあり得ない。実在論と観念論との間で可能とならなければならぬような結合の、すなわち「観念的なものと実在的なものとの調和」の形式のシュレーゲル自身による書き換えは、今度は体系から離れた諸概念において定式化される。「この新たな実在論」は、それが観念論に由来するのである以上、「あたかも観念論的な根底と地盤の上に漂っている」のでなければならず、従って詩 (Poestie) として現れるのでなければならぬ⁵⁸⁾。このような比喩はいい加減な仕方では選ばれている。シュレーゲルは、漂うようであり当てにならない結合という、こうした理念を更に拡大強化していく。

シュレーゲルによれば、調和は、「幻想 (Fantasie)」によって獲得される。この「幻想」のもとには、単に新たな着想を創造的に産み出すことや諸々の虚構を考え出すことよりも極めて多くのことが言われているのでなければならぬ。このことは、シュレーゲルがここで引き合いに出す著作家、すなわちスピノザに依拠することで明瞭となる。シュレーゲルからするならば、スピノザの体系全体は、幻想という視点のもとに包括的に理解される。シュレーゲルによれば、スピノザのもとでは、「一切の幻想の始原と終局が、汝ら個別的なものがその上で安らう普遍的な根底と基盤が見出される」。この定式においては、果たしてこうした「始原と終局」が幻想に属する性質のものなのか、それとも果たしてむしろこの場合幻想が終わりを迎えることが重要なのか、ということは未決定のまま

である。シュレーゲル自身が実際のところ、幻想を更に展開していく方向で考えていることは明白である。

また、シュレーゲルは、そのように考えるに当たって、「感情」を高く評価するところから話を始めている。「スピノザにおいては、幻想の場合と同様の仕方において、感情も存在している」。シュレーゲルは、浮遊(Schweben)の比喩を継続させながら、感情の役割を、またそれと共に幻想の役割を書き換えている。この比喩においては、対立するものの上に漂うことに対して「普遍的な根底と地盤」の役割が帰属するのであるが、シュレーゲルは、こうした根底を幻想のうちに見出すものと考えていた。

「透き通ったかすみは、見えざる仕方です。漂いながら、全体の上に漂うなかで見えるようになる。永遠の憧憬は、単一な作品の諸々の深みから至るところに共鳴を見出すのであり、またこの作品は、静かな偉大さにおいて根源的な愛の精神の息吹を感じるのである」⁽³⁰⁾。

こうした定式化のうちには、多くの根本的思想が目標設定的に集め合わされている。シュレーゲルの思考やこの時代のロマン主義者たちは、こうした様々な思想をめぐって動き回っている。それは例えば、諸対立をアイロニカルに結び合わせることであるとか、静かなる偉大さという擬古主義的な定式であったり、或いはまた憧憬と永遠というトポスであったりする。この場合の永遠というのは、満たされることのないプロセスのことを指すのではなく、基礎付けるはたらきが持続的に続く状態のことを指す。

本質的なのは、「共鳴 (Anklang)」、「かすみ (Dunst)」、また、息の吹き付けといったものを一つにまとめるような諸々のコンセプトである。統一 (Einheit) は、諸対立を集め合わせたり、或いは均一にならすことによって獲得

されるわけではない。調和は、包括的な媒体へと浸ることに於いて形成される。その際、こうした媒体は、視覚的、聴覚的、及び感情的・有機的な諸々の比喩へと置き換えられることになる。またそれと同時に、「根底にして地盤であるところのもの」と個別的な諸物との間に築かれるような連関は、第一諸原理からの導出という意味での連関なのではない。

幻想という、下位に位置付けられるように思われる能力は、スピノザを引き合いにしつつ、観念論的・実在論的に理解されるような思考や詩作 (Poetisieren) の全体性を担っている。スピノザは、数学的方法によって統一的身体のコンセプトを首尾一貫して表していく体系家として読まれるのではなく、感情の思想家として読まれるに至る。「幻想」は、スピノザ哲学の用語であるわけは決していないのだが、これに対し、「想像 (imaginatio)」の方は、スピノザが実際に高い価値を与えたものである。想像それ自身は、「*virtuti suae naturae*」に、すなわち人間の本性の積極的な徳に負っており。いかなる誤謬も含んでいないと理解される。真理ではなく、むしろ幻想による諸々の像の誤りこそ、一定の証示を必要とするといえる。⁽⁹⁾

シュレーゲルは、詩学的なかたちへの変換において、見かけの上では周縁的であるに過ぎないようなものの価値をこのようにして高めることについて、明確に言明している。シュレーゲルは、スピノザに認められるような幻想の基礎づけ (Fundierung) のうちに、「個別的な諸々の思いつきにおいてではなく、全体の構成において示されるような、ロマン主義的な詩のかの偉大な機知 (Witz) との大きな相似を」認める。⁽¹⁰⁾ 従来、個別的事例のために取って置かれていたものが、今や考えられる限り包括的な仕方において拡張されるに至る。

根本をなすところの方法上のコンセプトは、演繹的でもなければ、――厳密な導出が可能なるような基盤となるようないかなる諸原則も、「偉大な機知」への高まりにおいておいてさえも獲得され得ない――帰納的でもない。機

知に富んだ思いつき (ein witziger Einfall) は、帰納的論証の関心のもとに絶えず増加し得るような、個別的な観察よりも絶えずより以上のものであるといえる。これによって、機知と幻想の両者は、哲学の専門的諸概念と、とりわけて構成 (Konstruktion) という概念と直接に結び付けられることになる。

このことにまさに対応するような歩みや概念性といったものが観念論者達のもとに見出される。これらの観念論者達も同様に、哲学の新たな「器官 (Organ)」を探し求めており、また、シェリングが一八〇二年以降仕上げて行くことになるところの他ならぬ「構成」の方法のうちに、この「器官」を極めて明瞭に見出すに至る。包摂 (Subsumtion) という理想や、前提される第一の思考諸内容からの導出という理想は、同様に退けられるに至る。

個別的諸現象の構成ということは、ここではもはや本質的ではなく、むしろ、一切の個別的諸現象を普遍的な地平のもとに収めることこそ本質的であるとされる。その際、この地平は、一切の諸現象に共通する基盤としての役割を果たすことになる⁽⁸⁾。それによれば、構成ということが意味するのは、個別的事物をそれの中に含まれるところの普遍的なコンテクストへと、別の言葉で言えば、それがその内部で規定づけられるような、そうしたコンテクストへと超越させることである。ただしだからといって、個別的事物がこのようなコンテクストから導出可能となる、というわけではない。

諸論争の対称性は、ここでもまた目を引く。「機知」や「幻想」、或いは感情を含意するような「かすみ (Duff)」といった、他ならぬ哲学的にみるならば従属的な位置付けにあると思われるような諸能力が価値を高められるに至る。こうした価値の高まりにおいては、観念論的哲学の哲学的に見て野心的な構想との構造的な一致が維持されている。このことによってまたもや、そうした諸々の秩序概念が立ち現れるとともに、観念論と実在論との境界が直ちに無効なものとなされることになる。「諸事実 (Fakten)」と「想像力 (Einbildungskraft)」との対置は、そうしたこと

により不可能となるに至る。こうしたことは、観念論者や實在論者たちだけに当てはまるのではなく、むしろこれまでに見られた様々な対称性が示すように、一八〇〇年頃の論争の諸状況全体にも当てはまるといえる。⁽⁶⁴⁾

實在論や観念論の著作家達の偉大な功績は、このような数々の対称性やそこから生じる境界線を引く際の数々の困難さに注目し、殊更に論評を加えたことのうちにあるといえる。フィヒテとシェリングが一致して認めているのは、独断論的（これは彼らの用語でいうところの「實在論的」ということだが）と観念論的立場の両者は論証的に互いを論駁することが出来ない、ということである。シュレーゲルは、こうした文脈において、論争の諸形式の類型学を展開している。その際、この類型学が、實在論者や観念論者達の間で交わされた同時代の諸議論に依拠していることは明白である。⁽⁶⁵⁾

もしもそれでも何らかの差異を求めようとするのであれば、その場合、フィヒテとシュレーゲルがそうしたように、別の戦略を探し求めねばならない。フィヒテは、論証的な分析を性格特性や実存的決心のうちへと置き移している（「その人が如何なる哲学を選ぶのかということとは、その人が如何なる人間であるのか次第である」⁽⁶⁶⁾）。

シュレーゲルは、証明可能な価値評価に向かうのではなく、ある哲学形式への信仰告白という方向に最終的には向かわねばならないという、こうした思想を引き受けている。とはいえ、そのための基礎となるのは、「独断論の極めて広範な範囲における」「叙述」であるのでなければならず、「その際、最も優れた独断論者達が用いられたのであった」⁽⁶⁷⁾。

対話形式に対するロマン主義者たちの感受性は、「我々實在論者達」がかなりの程度の批判的意図のもとに同時に打ち立てているような、様々に異なる思考形式の構成に対して本質的な所で寄与を果たしている。その際、シュレーゲルにとって既にこうした構成のプロセスにおいて重要であったのは、対極的な諸対置（die polarisierenden

Gegenüberstellungen) を克服することなのであった。

註

- (1) 「対話」の引用は以下のテキストによる。Schlegel, Friedrich: "Gespräch über die Poesie". In: *Athenäum. Eine Zeitschrift von August Wilhelm Schlegel und Friedrich Schlegel*. Bd. 3. Stück 1 [1800]. Reprint Darmstadt 1992, S. 58-128. - S. 97-99.
- (2) Schlegel, "Gespräch", S. 98
- (3) Schlegel, "Gespräch", S. 98
- (4) Schlegel, "Gespräch", S. 99.
- (5) ヘンリッヒとその共同研究者達によって主導された「状況研究 (Konstellationsforschung)」は、明確に「カント主義と観念論との間の哲学的緊張関係の意識において引き受けられた」のであった。Henrich, Dieter: "Weitere Überlegungen zum Programm der Konstellationsforschung". In: *Konstellationsforschung*. Hg. v. Martin Mulrow u. M. Stamm. Frankfurt a.M. 2005, S. 207-218. - S. 215. その際、實在論の状況についての立ち入った再構成はなされなかった。また、インフレーター・フランクによる「原存在 (Ur-Sein)」と現実性との役割に関する論考を参照。この役割によって、初期ロマン派は絶対的観念論と対置されることになる。また、「根本命題哲学 (Grundsatzphilosophie)」の対置についても以下の論考を参照。Frank, Manfred: "Unerledigte Annäherung". *Die Anfänge der philosophischen Frühromantik*. Frankfurt a.M. 1997. Teil III. Ders.: *Auswege aus dem Deutschen Idealismus*. Frankfurt a.M. 2007, v.a. Kap. 2, 3. 更なる例は以下を参照。Frederick C. Beiser: *The Romantic Imperative. The Concept of Early German Romanticism*. Cambridge, Mass. u. London 2003.
- (6) Vgl. Plüder, Valentin: *Die Vernichtung von Idealismus und Realismus in der Klassischen Deutschen Philosophie*. Diss. Bochum 2010. 観念論者達と實在論者達との諸論争についてのこれまでに最も詳細なこの論考は、代表者の一人であるフリードリヒ・ハイネリヒ・ヤコービにのみ依拠して實在論者達の立場へと踏み込んでいる、というくらいがある。加えて、實在論と観念論の間に定められるべき関係の分析が、表題に示されるような「媒介」と、それに対し概念的により規定の弱い「結合 (Verquickung)」という形式の間で揺れ動いている (S. 11)。- Vgl. auch die Materialien und Analysen in Jaeschke, Walter (Hg.): *Transzendentalphilosophie und Spekulation. Der Streit um die Gestalt einer ersten Philosophie (1799-1807)*. 2 Bde. Hamburg 1993. - 特にマヤリンズにこのように下を参照。Kobayashi, Nobuyuki: "Die Idee der neuen Mythologie beim jungen Friedrich Schlegel". In: *Ästhetische Subjektivität*.

- Romantik & Moderne*. Hg. v. Lothar Knatz u. Tamehisa Otake. Würzburg 2005. S. 167-179. 同論考では、ヘルダーへの数多くの参照指示が見受けられる。また同論考では、極めて明確な分類分けが多岐にわたって提示されているが、そうしたやり方は、一八〇〇年頃の諸論争の複雑さに対して完全に正当であるとは言い切れない。(例えば、哲学に対しては観念論が、詩に対しては実在論が割り当てられているような場合がこれに当てはまる。その場合、中間のうちに漂うこと (ein Schweben in der Mitte) による総合から生じるのは、極めて「ロマン主義的な」詩であることになろう。
- (7) ハンスマティアン・ペリー (*Kant über die symbolische Erkenntnis Gottes*. Berlin u. Boston 2012) が示すところでは、カントによるシンボルの諸認識についての諸考察もまた (今日の宗教哲学におおつてそう呼ばれるところの) 実在論と反実在論との間の「中間の道」の探求としてとらえられ得るとされる。vgl. das Kapitel über "Die analoge Erkenntnis und Rede von Gott ist ein Mittelweg zwischen einem naiven religiösen Realismus und einem theologischen Anti-Realismus", S. 426-435.
- (8) つれづれには、例えば以下を参照。Beiser, *Romantic Imperative*.
- (9) Schelling-SW, I,7,351.
- (10) 実在論に関する諸論争に対するシュレーゲルの意義については、以下の論考が叙述している。Moltor, Franz Joseph: *Der Wendepunkt des Antiken und Modernen. Oder Versuch den Realismus mit dem Idealismus zu versöhnen*. Frankfurt a.M. 1805 (このテクストは、イザーク・フォン・ジンクレーアとともに、初期ロマン主義の状況におけるもっとも重要な人物の一人に捧げられている)。「私の体系の中心点は、フリードリヒ・シュレーゲルの諸著作のうちに見出される」(S. 6).
- (11) Schlegel, Friedrich: "Anhang zur Logik. Kritik der philosophischen Systeme [Köln 1805-1806]". In: *Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe*. Bd. 13. Hg. v. Jean-Jacques Anstett. München u.a. 1964. S. 323-384. - S. 357f.
- (12) Schlegel, "Anhang", S. 361.
- (13) *ibid.*
- (14) *Ibid.* シュリンゲンとハーゲル両者によるヤコビ批判の一致について論じたものとして以下を参照。Zovko, Jure: *Friedrich Schlegel als Philosoph*. Paderborn u.a. 2010, Kap. 6.
- (15) Schlegel, "Anhang", S. 362.
- (16) Schlegel, "Anhang", S. 371.
- (17) 「ロマン主義的実在論 (romantischer Realismus)」は、一九世紀の諸展開に関する文学のカテゴリーとなつていよう。(vgl. z.B. Fanger, Donald: *Dostoevsky and Romantic Realism. A Study of Dostoevsky in relation to Balzac, Dickens and Gogol*. Cambridge, Mass. 1965. 更にまた、哲学的実在論が一九二〇世紀の極めて神学的・形而上学的な刻印を帯びた「新実在論 "new realism"」の形態においてアメリカ合衆国で辿つたような特別な歴史に対し、こうした用語法がどのようなかたちで依存しているのかについては、更に吟味

- する必要がある。(鍵となる著作として、以下を参照。Holt, Edwin B. u.a.: *The New Realism. Cooperative Studies in Philosophy*. New York 1912).
- (18) Vgl. Trappe, Tobias: "Artikel, Realismus I". In: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*. Bd. 8. Basel 1992, Sp. 148-156. - "独断論"にしろは、例えばフーヘナの以上の著作が詳しく論じている。Fichte, Johann Gottfried: "Versuch einer neuen Darstellung der Wissenschaftslehre [1797/1798]". In: *J.G. Fichte-Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*. Bd. 14. Stuttgart-Bad Cannstatt 1970, S. 169-281.
- (19) 例えばZovko, *Friedrich Schlegel* s. 83 中での、ヤコービの小説の登場人物であるヴォルデマイルについての記述を参照。シュレーゲルは、この人物をエゴイストでもっと批判する。ジャン・パウルの『クラヴィス・フィヒテナーナ』では、極めて機知に富んだかたちで、観念論に対する批判が独我論(Solipsismus)の形式への批判として先鋭化されている。主人公のライプゲーパーは、フーヘテ主義者を自認するフーヘテ批判者であるが、無造作に「フーヘテが書きたいくらいの本をも」無理矢理自分のものにしてしまう。「何故ならば、フーヘテがメン・メンクに浸ることが出来る前に、私がまずもって彼を定立し、或いは作らなければならぬのだから」(Jean Paul: "Clavis Fichtiana seu Leibgebertiana (Anhang zum I. komischen Anhang des 'Trians')". In: *Jean Paul Samtliche Werke*. Abt. 1. Bd. 3. Hg. v. Norbert Miller. München u. Wien 1999, S. 1011-1056. - S. 1037f.) 従って、自分のメンにだけこもるこれらの思想を紙にまたすことが出来るわけである。
- (20) Feder, Johann Georg Heinrich: *Ueber Raum und Causalität zur Prüfung der Kantischen Philosophie*. Göttingen 1787, S. XXII.
- (21) Feder, Johann Georg Heinrich u. Garve, Christian, Rezension zu Kant: *Kritik der reinen Vernunft* [1782]. In: *Rezensionen zur Kantischen Philosophie 1781-1787*. Bebra 1991, S. 10-17. - Vgl. auch Sassen, Brigitte (Hg.): *Kant's Early Critics: The Empiricist Critique of the Theoretical Philosophy*. Cambridge 2000.
- (22) 『フロロコメナ』補遺におけるカンクの詳細な返答については以下を参照。Kant, Immanuel: *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaften wird auftreten können* [1783]. In: *Kant's gesammelte Schriften*. Hg. v. der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Bd. IV. Berlin 1911, S. 253-383. - S. 372-380.
- (23) Jacobi, Friedrich Heinrich: *Jacobi an Fichte* [1799]. In: *Jacobi Werke*. Bd. 2,1. Hamburg u. Stuttgart 2004, S. 191-258, S. 203-206, 194.
- (24) 以下の論考で詳しく議論が展開されている。Pluder, *Vermittlung*.
- (25) Jacobi, Friedrich Heinrich: *David Hume über den Glauben oder Idealismus und Realismus. Ein Gespräch* [1787]. In: *Jacobi Werke*. Bd. 2,1. Hamburg u. Stuttgart 2004, S. 5-112. - S. 107.
- (26) Jacobi, *David Hume*, S. 108.

- (27) Jacobi, *David Hume*, S. 112.
- (28) 共同作業の具体的な例は、『ラインホルトの『寄与』におけるヤコビーとバルデューリ両者の諸テクストの公刊や、或いはケッペンによる『シェリングの教説について』を収録した、ヤコビーの書簡のうちに見出される。様々なテクストのコラージュを含むヤコビー自身のテクストがここでも範例として役立つであろう。――実在論者達のグループについての最初の外観については、以下を参照。Ziele, Paul: "Editorischer Bericht". In: Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph: *System des transszendentalen Idealismus*. In: *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling. Historisch-kritische Ausgabe*. Bd. 19.2. Stuttgart-Bad Cannstatt 2005.
- (29) Bardili, Christoph Gottfried: *Philosophische Elementarlehre mit beständiger Rücksicht auf die ältere Literatur*. Heft 1. Landshut 1802, S. 34. バルデューリについては以下を参照。Painmann, Rebecca: *Das Denken als Denken. Die Philosophie des Christoph Gottfried Bardili*. Stuttgart-Bad Cannstatt 2009.
- (30) Reinhold, Karl Leonhard: "Neue Darstellung der Elemente des rationalen Realismus". In: *Beiträge zur leichtern Uebersicht des Zustandes der Philosophie beyrn Anfange des 19. Jahrhunderts*. Hg. v. K.L. Reinhold. Heft 3. Hamburg 1802, S. 128-162. - S. 160.
- (31) Feder u. Garve, Rezension, S. 14, 16f.
- (32) つうじた観点からすれば、カント以前の哲学の諸形式への接続は、更なる分析に役立つであろう。
- (33) Wrede, Erhard Georg Friedrich: *Antilogie des Realismus und Idealismus. Zur nähern Prüfung der ersten Grundsätze des Leibnizischen und Kantischen Denksystems*. Halle 1791. カントは、キントルマンのヤコビマンで説教師として活動していた。
- (34) Wrede, *Antilogie*, S. 3.
- (35) Wrede, *Antilogie*, S. 4.
- (36) Wrede, *Antilogie*, S. 7.
- (37) Rückert, Joseph: *Der Realismus, oder Grundsätze zu einer durchaus praktischen Philosophie*. Leipzig 1801.
- (38) Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph: "Rückert und Weiss, oder die Philosophie zu der es keines Denkens und Wissens bedarf" [1802]. In: *Hegel Gesammelte Werke*. Hg. v. der Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Bd. 4. Hamburg 1968, S. 239-255.
- (39) Rückert, *Realismus*, S. 3.
- (40) Rückert, *Realismus*, S. 6.
- (41) Rückert, *Realismus*, S. 7.
- (42) Rückert, *Realismus*, S. 9.
- (43) Rückert, *Realismus*, S. 11.
- (44) Rückert, *Realismus*, S. 23.

- (45) Rückert, *Realismus*, S. 119.
- (46) Weßg, Christian: *Wirke über eine durchaus praktische Philosophie. Als Vorträger derselben*. Leipzig 1801.
- (47) Koeppen, Friedrich: *Schellings Lehre oder das Ganze der Philosophie des absoluten Nichts. Nebst dreyn Briefen verwandten Inhalts von Friedr. Heim. Jacobi*. Hamburg 1802. ケッペンとは、イエーナでフーヒテとラインホルトのもとで学んでいたが、後にゲッティンゲンで教鞭をとり、一八〇七年にヤコービの招きによりランツフート大学で教鞭をとった。ヤコービ著作集の最初の版の編集者の中の一人がこのケッペンであった。
- (48) Koeppen, *Schellings Lehre*, S. 213.
- (49) Koeppen, *Schellings Lehre*, S. 11.
- (50) Koeppen, *Schellings Lehre*, S. 15.
- (51) Koeppen, *Schellings Lehre*, S. 186f.
- (52) Koeppen, *Schellings Lehre*, S. 189f.
- (53) Koeppen, *Schellings Lehre*, S. 12.
- (54) これについては、例えば上述のマンフレート・フランクの一連の論考と、その中で原則哲学に対する批判やバイザーによるシェーゲルの反基礎づけ主義に関する論考を参照。Beiser, *Romantic Imperative*.
- (55) Jean Paul, "Clavis", S. 1013. シュレーゲルに対する批判については、同書 S. 1030 参照
- (56) 新たな諸能力の導入にあたってとりわけ生産的な役割を果たすのがヨハン・ゴットフリート・ホルダーである。「宇宙」がそのうちに安らう「感覚的確信」と「態度 (Haltung)」を同時に認識させるような、あらゆる意味の「総合叙述 (Gesamtdarstellung)」との間の「意味」についてのホルダーの理解については、以下を参照。Herder, Johann Gottfried: "Verstand und Erfahrung. Eine Metakritik zur Kritik der reinen Vernunft [1799]". In: *Herder. Sämtliche Werke*. Hg. v. Bernhard Suphan. Bd. 21. Berlin 1881, Kap. 6: "Vom Idealismus und Realismus".
- (57) Schlegel, "Gespräch", S. 99.
- (58) *Ibid.*. ノヴァーリスにおいては、詩と実在論の両者はもっと密接に結び付けられている。ノヴァーリスの『新断片』における定式化を参照。「詩は、真に絶対的に実在的なものである。この実在的なものは、私の哲学の核心である。より詩的になればなるほど、ますます真となる」。 (Novalis: *Schriften*. Bd. 2. Hg. v. Richard Samuel. Stuttgart u.a. 1981, S. 647). ・フーヒテにおける「漂うつた」のような比喩については以下の論考を参照。Janke, Wolfgang: *Fichte. Sein und Reflexion - Grundlagen der kritischen Vernunft*. Berlin 1970; Hühn, Lore: "Das Schweben der Einbildungskraft. Eine frühromantische Metapher in Rücksicht auf Fichte". In: *Fichte-Studien* 12 (1997), S. 127-151; Asmuth, Christoph: "Das Schweben ist der Quell aller Realität". Platner, Fichte, Schlegel und Novalls

- über die produktive Einbildungskraft". In: *e-Journal Philosophie der Psychologie* (<http://www.jp.philo.at/texte/Asmuth1.pdf>; 6.10.2012).
- (59) Schlegel, "Gespräch", S. 100f.
- (60) 特以下を参照。Spinozas *Ethica*, 2p17s (Spinoza, Benedictus de: "Ethica Ordine Geometrica demonstrata". In: *Spinoza Opera - Werke*, Hg. v. Konrad Blumenstock, Darmstadt 1980, Bd. 2, S. 84-577, - S. 198f.). とりわけ『エチカ』の第三巻に示される「想像力 (imaginatio) は人間の諸情動と密接に結びついている。同時に議論については、ヤコービによる述語に関する提案を参照。ヤコービは『スピノーザ哲学の議論の文脈において、意識の代わりに「存在の感覚 (sentiment de l'être)」を用いることを提案している」(Jacobi, Friedrich Heinrich: *Ueber die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendelssohn* [1785]. In: *Jacobi Werke*, Bd. 1.1, Hamburg / Stuttgart-Bad Cannstatt 1998, S. 1-268, - S. 105). また『以下を参照。Lord, Beth: "Between Imagination and Reason. Kant and Spinoza on Fictions." In: *Inventions of the Imagination. Romanticism and Beyond*, Hg. v. Richard T. Gray u.a. Seattle, London 2001, S. 36-53.
- (61) Schlegel, "Gespräch", S. 102. - シェンラーゲルによる「機知」の理解については以下を参照。Neumann, Gerhard: *Ideeparasite. Untersuchungen zur Aphoristik von Lichtenberg, Novalis, Friedrich Schlegel und Goethe*, München 1976, S. 456-468. ノイマンは「機知が果たす総合の機能を強調しており、また「機知」が「意味 (Sinn) とはとんと」同義である」ということを確認している。
- (62) つれにこいては、更なる文献指示を含んだものとして以下を参照。Ziche, Paul: "Die reinen Vernunftwissenschaften: Mathematik und, Philosophie im Allgemeinen". In: *"Die bessere Richtung der Wissenschaften. Schellings "Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums" als Wissenschafts- und Universitätsprogramm*, Hg. v. dems. u. Gian Franco Frigo, Stuttgart-Bad Cannstatt 2011, S. 89-114.
- (63) 例えば、以下の論考ではなお対置がなされている。Daston, Lorraine : *Wunder, Beweise und Tatsachen. Zur Geschichte der Rationalität*, Frankfurt a.M. 2001, S. 108; 「一七八〇年と一八二〇年の間にこうした配列 (Konfiguration) は劇的に変化している。極めて簡潔に言うならば、諸事実はますます堅固なものとなり、想像力は軌道から逸れ、また芸術と学問は諸々の目的とそれぞれが集団の特性においてますます互いから離れていく」。
- (64) Fichte, "Versuch", S. 191-195; Schlegel, Friedrich: "Transcendentalphilosophie [Jena 1800-1801]". In: *Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe*, Bd. 12, Hg. von Jean-Jacques Anstett, München u.a. 1964, S. 1-105. - S. 73. 両者は「これらの箇所から、諸論争の攻撃的激しさを再び明らかに表明している」。
- (65) Fichte, "Versuch", S. 195
- (66) Schlegel, "Transcendentalphilosophie", S. 73f.; また『以下を参照。Ders.: "Die Entwicklung der Philosophie in zwölf Büchern [Köln 1804-1805]". In: a.a.O., S. 107-480. - Zum Realismus S. 153-162.

- Asmuth, Christoph: "Das Schweben ist der Quell aller Realität". Platner, Fichte, Schlegel und Novalis über die produktive Einbildungskraft". In: *e-Journal Philosophie der Psychologie* (<http://www.jp.philo.at/texte/AsmuthCl.pdf>; 6.10.2012).
- Bardili, Christoph Gottfried: *Philosophische Elementarlehre mit beständiger Rücksicht auf die ältere Literatur*. Heft 1. Landshut 1802.
- Beiser, Frederick C.: *The Romantic Imperative. The Concept of Early German Romanticism*. Cambridge, Mass. u. London 2003.
- Daston, Lorraine: *Wunder, Beweise und Tatsachen. Zur Geschichte der Rationalität*. Frankfurt a.M. 2001
- Fanger, Donald: *Dostoevsky and Romantic Realism. A Study of Dostoevsky in relation to Balzac, Dickens, and Gogol*. Cambridge, Mass. 1965.
- Feder, Johann Georg Heinrich u. Garve, Christian. Rezension zu Kant: *Kritik der reinen Vernunft* [1782]. In: *Rezensionen zur Kantischen Philosophie 1781/1787*. Bebra 1991, S. 10-17.
- Feder, Johann Georg Heinrich: *Ueber Raum und Causalität zur Prüfung der Kantischen Philosophie*. Göttingen 1787.
- Fichte, Johann Gottfried: "Versuch einer neuen Darstellung der Wissenschaftslehre [1797/1798]". In: *J.G. Fichte-Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*. Bd. 14. Stuttgart-Bad Cannstatt 1970, S. 169-281.
- Frank, Manfred: "Unendliche Annäherung". *Die Anfänge der philosophischen Frühromantik*. Frankfurt a.M. 1997.
- Frank, Manfred: *Auswege aus dem Deutschen Idealismus*. Frankfurt a.M. 2007.
- Herder, Johann Gottfried: "Verstand und Erfahrung. Eine Metakritik zur Kritik der reinen Vernunft [1799]". In: *Herder Sämtliche Werke*. Hg. v. Bernhard Suphan. Bd. 21. Berlin 1881.
- Heinrich, Dieter: "Weitere Überlegungen zum Programm der Konstellationsforschung". In: *Konstellationsforschung*. Hg. v. Martin Mulrow u. Marcelo Stamm. Frankfurt a.M. 2005, S. 207-218.
- Holt, Edwin B. ua.: *The New Realism. Coöperative Studies in Philosophy*. New York 1912.
- Hühn, Lore: "Das Schweben der Einbildungskraft. Eine frühromantische Metapher in Rücksicht auf Fichte". In: *Fichte-Studien* 12 (1997), S. 127-151.
- Janke, Wolfgang : *Fichte. Sein und Reflexion - Grundfragen der kritischen Vernunft*. Berlin 1970.
- Jean Paul: "Clavis Fichtiana seu Leibgeberiana (Anhang zum I. komischen Anhang des Titans)". In: *Jean Paul Sämtliche Werke*. Akt. I. Bd. 3. Hg. v. Norbert Miller. München u. Wien 1999, S. 1011-1056.
- Jacobi, Friedrich Heinrich: *David Hume über den Glauben oder Idealismus und Realismus. Ein Gespräch* [1787]. In: *Jacobi Werke*. Bd. 2.1. Hamburg u. Stuttgart 2004. S. 5-112.

- Jacobi, Friedrich Heinrich: *Ueber die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendelssohn* [1785]. In: *Jacobi Werke*. Bd. 1.1. Hamburg / Stuttgart-Bad Cannstatt 1998, S. 1-268
- Jacobi, Friedrich Heinrich: *Jacobi an Fichte* [1799]. In: *Jacobi Werke*. Bd. 2.1. Hamburg u. Stuttgart 2004, S. 191-258.
- Jaesske, Walter (Hg.): *Transzendentalphilosophie und Spekulation. Der Streit um die Gestalt einer ersten Philosophie* (1799-1807). 2 Bde. Hamburg 1993.
- Kant, Immanuel: *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können* [1783]. In: *Kants gesammelte Schriften*. Hg. v. der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Bd. IV. Berlin 1911, S. 253-383.
- Kobayashi, Nobuyuki: "Die Idee der neuen Mythologie beim jungen Friedrich Schlegel". In: *Ästhetische Subjektivität: Romantik & Moderne*. Hg. v. Lothar Kratz u. Tanelias Ojabe. Würzburg, S. 167-179.
- Koepfen, Friedrich: *Schellings Lehre oder das Ganze der Philosophie des absoluten Nichts. Nebst drey Briefen verwandten Inhalts von Friedrich Heim. Jacobi*. Hamburg 1802.
- Lord, Beth: "Between Imagination and Reason. Kant and Spinoza on Fictions". In: *Inventions of the Imagination. Romanticism and Beyond*. Hg. v. Richard T. Gray u.a. Seattle u. London 2001, S. 36-53.
- Maly, Sebastian: *Kant über die symbolische Erkenntnis Gottes*. Berlin u. Boston 2012.
- Molitor, Franz Joseph: *Der Wendepunkt des Antiken und Modernen. Oder Versuch den Realismus mit dem Idealismus zu versöhnen*. Frankfurt a. M. 1805.
- Neumann, Gerhard: *Ideeparatase. Untersuchungen zur Aphoristik von Liechtenberg, Novalis, Friedrich Schlegel und Goethe*. München 1976.
- Novalis: *Schriften*. Bd. 2. Hg. v. Richard Samuel. Stuttgart u.a. 1981.
- Painman, Rebecca: *Das Denken als Denken. Die Philosophie des Christoph Gottfried Bardili*. Stuttgart-Bad Cannstatt 2009.
- Plüder, Valentin: *Die Vermittlung von Idealismus und Realismus in der Klassischen Deutschen Philosophie*. Diss. Bochum 2010.
- Reinhold, Karl Leonhard: "Neue Darstellung der Elemente des rationalen Realismus". In: *Beyträge zur leichtern Uebersicht des Zustandes der Philosophie beyrn Anfange des 19. Jahrhunderts*. Hg. v. K.L. Reinhold. Heft 3. Hamburg 1802, S. 128-162
- Rückert, Joseph: *Der Realismus, oder Grundsatze zu einer durchaus praktischen Philosophie*. Leipzig 1801.
- Sassen, Brigitte (Hg.): *Kants Early Critics: The Empiricist Critique of the Theoretical Philosophy*. Cambridge 2000.
- Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph: "Rückert und Weiss, oder die Philosophie zu der es keines Denkens und Wissens bedarf" [1802]. In: *Hegel Gesammelte Werke*. Hg. v. der Westfälischen Akademie der Wissenschaften. Bd. 4. Hamburg 1968, S. 239-255.
- Schlegel, Friedrich: "Gespräch über die Poesie". In: *Athenäum. Eine Zeitschrift von August Wilhelm Schlegel und Friedrich Schlegel*. Bd. 3.

- Stück 1 [1800]. Reprint Darmstadt 1992, S. 58-128.
- Schlegel Friedrich: "Trancendentalphilosophie [Jena 1800-1801]". In: *Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe*. Bd. 12. Hg. von Jean-Jacques Anstet. München u.a. 1964, S. 1-105.
- Schlegel, Friedrich: "Die Entwicklung der Philosophie in zwölf Büchern [Köln 1804-1805]". In: *Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe*. Bd. 12. Hg. von Jean-Jacques Anstet. München u.a. 1964, S. 107-480.
- Schlegel, Friedrich: "Anhang zur Logik [Köln 1805-1860]. Kritik der philosophischen Systeme". In: *Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe*. Bd. 13. Hg. v. Jean-Jacques Anstet. München u.a. 1964, S. 323-384.
- Spinoza, Benedictus de: "Ethica Ordine Geometrica demonstrata". In: *Spinoza Opera - Werke*. Hg. v. Konrad Blumenstock. Darmstadt 1980. Bd. 2. S. 84-557.
- Trappe, Tobias: "Artikel, Realismus I". In: *Historisches Wörterbuch der Philosophie*. Bd. 8. Basel 1992. Sp. 148-156.
- Weiß, Christian: *Winke über eine durchaus praktische Philosophie. Als Vorläufer derselben*. Leipzig 1801.
- Wrede, Erhard Georg Friedrich: *Anthologie des Realismus und Idealismus. Zur nähern Prüfung der ersten Grundsätze des Leibnizischen und Kantischen Denksystems*. Halle 1791.
- Ziche, Paul: "Editorischer Bericht". In: Schelling, Friedrich Wilhelm Joseph: *System des transscendentalen Idealismus*. In: *Friedrich Wilhelm Joseph Schelling. Historisch-kritische Ausgabe*. Bd. 19.2. Stuttgart-Bad Cannstatt 2005.
- Ziche, Paul: "Die, reinen Vernunftwissenschaften: Mathematik und, Philosophie im Allgemeinen". In: "Die bessere Richtung der Wissenschaften. Schellings "Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums" als Wissenschafts- und Universitätsprogramm. Hg. v. dems. u. Gian Franco Frigo. Stuttgart-Bad Cannstatt 2011. S. 89-114.
- Zovko, Jure: *Friedrich Schlegel als Philosoph*. Paderborn u.a. 2010.

(本翻訳は、二〇一四年九月二十九日に東北大学文学研究科で開催された、科学研究費補助金・基盤B「自然観の変遷と人間の運命の研究」の講演会の翻訳原稿を基にしている。この場を借りて、当日の講演の際、及び本論集における翻訳の機会を与えて下さった訳者の師匠である座小田豊総長特命教授には改めて感謝の言葉を捧げたい。また、講演の際に様々な有益な助言を与えて下さった新潟大学の栗原隆教授にも感謝を申し上げます。)

(ハウル ツイッヒェ・ユトレヒト大学)
(翻訳：嶺岸佑亮)